[redacted]

H4.1.28(火) 彼 343P　悌儁の争創 2129P　まつげ 睫 2083P　2,149P　2109P 本当は西北 2175 1/3　やまと伽赤 2110P　玉体 天皇のからだ 582P　むしばむ 蝕む 2150P　切れ切れの雲　2421P

第三十三章　悌儁の安否をたずねて

正始六年（二四五）の春を迎えたというのに、——邪馬台国の女王の悲しみは、癒えるどころか、いよいよ激しく、その心と玉体とを蝕んでいくようだった。

西北の彼方から、ちぎれちぎれの白雲がやってくる。そんな雲を見てさえ、悌儁の姿が思い描かれるのであろう。日御子の睫を濡らして、はらはらと白いものがこぼれ落ちた。（写真図版357参照）く光る

「ほんの一目だけでも、お会いしとうございます」

遥かな国の方から次々に漂い来る白雲を見上げながら、女王日御子は、——

ただひたすらに、夫君を恋しく想った。

〈掖邪狗の話によれば、あのお方はすっかり年老いて、髪など真白になってしまわれたと

のだった 次頁7行　「なおも」次頁6行

2109P 1/2

いう。なんとおいたわしいことよ。そして、みるからに弱々しくなっておられたともいう。……！！ああ、生きておいでかどうか、それだけでも知りとう存じます〉

日御子は「泗水」（＝合志川）の支流である「上生川」（宮城部あたりに端を発して北流する水量豊かな川）の水面を見詰めながら、なおももの思いに沈み込むのだった。

そんなとき、幅広の清らかな川に群れている瀟洒な鳥の姿が目にとまった。（万巻第二〇―四四六二参照）

嘴と足とが赤い、鴫くらいの大きさの白い鳥たちが「水の上」に遊びつつ魚をくっていた。それは、都鳥（ユリカモメ）であった。

邪馬台国の都の内で無心に遊んでいるその可憐な鳥に見入りながら、日御子はそっと、独言した。

「都鳥たちよ。お前達も、もうすぐこの邪馬台国の都から、海の彼方の国へ飛び去っていくのね。――ああ梯儁様、海の向こうの国へ

2.150P−3/4

・カラー
（はみ出して）
・顔の上半分
大きく載せて
下さい。

・暗くならないように
して下さい。
明るくお願い
します。

ヤメル
小林431P　小林1072P

（さいしゅうご）
・海で採餌後
やってきて、
（みずあ）
水浴びをし、
塩を落とす。

14QG　写真図版362　ユリカモメの群翔（ぐんしょう）（冬羽）
13QG『日本の野鳥』山と溪谷社、1992年4月1日（15刷）発行、280頁参照。　431P

2,150P－2/4

・カラー

・右頁の下半分。
はみ出して
大きく掲載
下さい。

・暗くならない
ようにして下さい。
明るくお願い
します。

次頁

⊕2152P－3/4 16行
琵琶湖で和をすごす都鳥
カット

「伊勢物語」
117頁

14Q 写真図版363　賀茂川の水の上に遊ぶ都鳥（ユリカモメ）

13Q 『水野克比古作品集』京都雪月花、水野克比古、毎日新聞社、1992年1月30日発行、124頁参照。　432P

2,150P− 4/4

→ カット

・左頁の右下(奇数頁)に大きく載せて下さい。

14QG

写真図版364　ユリカモメ（成鳥冬羽）

13QG

『日本の野鳥』山と溪谷社　1992年4月1日(15刷)発行　280頁参照

12Q4 ・冬羽では、嘴(くちばし)と脚(あし)が赤く、翼(つばさ)の上面は淡(あわ)い青灰色で、初列風切羽(かぜきりばね)の先が黒い。夏羽では、頭部(とうぶ)が黒くなる。

伊勢物語[赤] 117p
〃 (小) 47p
名作文学の鑑賞 14p

2,151p—1/5

歌物語 名作文… 15上
「自筆」名作文学の鑑賞 14p 伊勢(正) 117p

去って行かれた様侍様は、時には私のことを思い出して、『ありやなしや』（生きているかどうか）と心配して下さっているかしら」

間近につき従っている女達は、その言葉を聞いて、皆こぞりて泣き伏し、袖を濡らした。

＊

『伊勢物語』第九段に、有名な東下りの歌物語がある。

主人公は、次から次へというような恋をした。この男は、あるとき皇后と恋に落ちて京都から追放され、東国へ降り、隅田川のほとりへとやってきた。この時の旅の様子を、以下のように述べている。

ーーーー武蔵の国と下総の国との中に、いと大きなる河あり。それをすみだ河といふ。その河のほとりに群れ居て（一行が足をとめて）思ひやれば（遥かな旅路を思いやると）、「限

どのようにお過ごしになっ（ ）ておられるのでしょう

りなく遠くも来にけるかな」とわび合へるに、渡守「はや舟に乗れ、日も暮れぬ」といふに乗りて渡らんとするに、皆人物わびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず。さる折しも、白き鳥の嘴と脚と赤き、鴫の大きさなる、水のうへに遊びつつ魚を食ふ。京には見えぬ鳥なれば、皆人見知らず。渡守に問ひければ、

「これなん都鳥」といふをききて、

名にし負はばいざ事とはむ宮こ鳥
わが思ふ人はありやなしやと

とよめりければ、舟こぞりて泣きにけり。

とある。

この歌は、大略、

「都鳥よ、お前がその名にそむかないならば、さあ尋ねてみよう。都にいる私の思う人は無事でいるだろうか、どうだろうかと」

という意味である。（「竹取物語・伊勢物語・大和物語」日本古典文学大系、岩波書店、一一七頁。「竹取物語・伊勢物語・落窪物語」

日本古典文庫(7)河出書房新社、四七頁。「名作文学の鑑賞」延原政行、金園社、一四頁参照)

とはいえ、少々気にかかることがある。

「名に負はば」の歌の第五句の句ありやなしやは、本来、「居るか、居ないか」の意であって、つまり「皇后は、生きておいでなのだろうか、それとも生きておいでにならないのだろうか」と歌っているのである。(「広辞苑」〈ありやなしや〉。「名作文学の鑑賞」延原政行、金園社、一四頁「無事に生きているかどうか」参照)

・しかし、都から追放されたとはいえ、同じ日本国内のそんなに遠くない所にいる男が、「皇后は、生きておいでだろうか、それともおなくなりになったのだろうか」などといった穏当でない五句――いわば不謹慎、不遜とも、とられかねないこのような五句を、本当に作ったとは考えにくいように思わ

れる。

「禁城の内なる皇后は、どのようにお過しであろうか。お元気なのだろうか」と心配したというのならともかく、「皇后は、生きておられるだろうか。死んでしまわれたのだろうか」と口に出して言う筈はあるまい。

②また、〈この歌を作った男が、皇后の安否を気づかって、一人しみじみ泣いた〉というのならともかく、どうして舟に乗り合わせた人がこぞって泣いたのか、理解しにくい。

●この段（第九段）の冒頭に、「あづまの方に住むべき國求めにとて行きけり。もとより友とする人ひとりふたりしていきけり。」云々とあるところを見ると、――「舟乃は、隅

田川を横断する乗り合い舟であり、この舟に
は見知らぬ人が乗っていたものと思われる。
こうした人たちが、皆、「京」に思う人を
残してきたわけではあるまい。
つまり、舟中の者たち皆が、

名にし負はばいざ事とはむ宮こ鳥
わが思ふ人はありやなしやと

という歌を聞いて、京都の人を思い起こして
そって泣いたとは考えにくい。
なるほど
「乗りて渡らんとするに、皆人物わびしく
て、京に思ふ人なきにしもあらず」
と記されてはいるが、――何となく分った
ような、分らないような、すっきりしない話
である。

次頁から

取留 云1628°　思ひ煩う 327°　⊕2150° 海の彼方の国へ去って

2,152 P—1/4

本歌 云2053° 典処となった歌 もとうた 云2193°

前頁A

あるいは、もしかしたら、へこの当時よく知られていた本歌があって、その歌を典処として、「名にし負はばの歌が作られた」という背景があったのかも知れない。

そして、その本歌は、

梯儁自身が自ら作ったものか、それとも、二人の胸中を思い量って誰か他の者が作ったのか、などといったことはともかくとして、

「海の向こうの中国へと帰っていった梯儁を東海海中の倭国の都城の内の皇后（乙姫）がお慕い〔いし〕「ありやなしや」（生きておいでかどうか）と想い煩った」といった内容のものであったろうかと、取留めもなく（とながら）想像される。

悲話 1907 悲しい物語　2,152p–2/4　2151-2/5　憂え 219p　大海 2179p-2/2

また

大海を隔てた異国の梯儁も――遠い邪馬台国の皇后の身を案じ

「ありやなしや」

〈生きておいでなのだろうか。それともお亡くなりになってしまわれたのだろうか〉

と憂えたというのであれば、理解できる〉とのように思われる。

すなわち、

名にし負はば　いざ事とはむ　宮こ鳥
わが思ふ人は　ありやなしやと

という歌を聞いた船中の貴人達は、皇后〈神功皇后〉と梯儁とが遠く離れて互いに慕いあった往古の悲話を思い起こしたからこそ、鮮烈な感動を覚え　皆こぞって泣いたのであろう、と想察される。

＊

日本の野鳥280ﾍﾟ　安威川にもユリカモメがいる。　こと

2,152P－3/4

参考迄に述べると、チドリ目、カモメ科の「都鳥」（ユリカモメ）について、次のように解説されている。

「くちばしと脚が赤い、全体に白っぽい小形のカモメ類。ユーラシア大陸の温帯から亜寒帯で広く繁殖し、日本には冬鳥として多数が渡来し、主に本州以南で越冬する。越冬期には、海岸、港、河口などで数十羽から数百羽の群れが見られる。

昼間、他のカモメ類よりもよく内陸部に入り、川の中・下流、湖、堀などでも見られる。河口から数十キロも川をさかのぼることがある。

昼間は内陸部で生活する個体も、夕方になると川を下り、海上へ出て海面に浮かび夜を過ごす。琵琶湖で夜を過ごす群れもあることが知られている。　云々」

という。（「日本の野鳥」高野伸二、山と溪谷社、二八〇頁、〈ユリカモメ〉参照）

なお、「都鳥」（ユリカモメ）は、現在、

コクヨ　ケー20　20×20

2150－3/4　賀茂川のユリカモメ　こと

冬期になると、――京都の鴨川などの河川で
かなり大きな群れが見られる。

白っぽい端正な『都鳥』が、飛翔したり、水の上に浮んだりしている様子は風雅である。

『伊勢物語』に、

「京には見えぬ鳥なれば、云々」

と記されているが、その通りだったとすると平安時代の京都では『都鳥』が見られなかった、ということになる。

しかし、ひょっとしたら、在原業平は鳥についてあまり関心を持っておらず、京都に住んでいながら、『都鳥』の存在に気がつかなかっただけなのかも知れない。

たぶん、淀川の本流・支流・琵琶湖などにも『都鳥』がいたに相違ない。

難斗米の旅立ち

邪馬台国の女王日御子の悲しみを見るに見かねていた難斗米は、正始六年（二四五）春のあるとき、ーーー女王の前に平伏して、こう懇願した。

「私をもう一度、洛陽の都へお遣わしいただきとう存じます。聞くところによりますと魏国は昨年高句麗の王都丸都城を陥落させ、今年に入ってからも尚その追撃の手を緩めず日となく厳しく攻め立てているといいます。

ーーーそして一方、魏国は、韓諸国に対して苛酷な容赦ない要求を押しつけているそうです」

「ーーーーーーー」

「幸い、我が倭国に対しては未だそういった露骨な要請が来ておりません。しかし察するところ、ーーー魏国はいま、東方地域に対する支配力の拡大を目論んでおります。このことは、我国にとって脅威的な重大事であると申せましょう。

もし、海北の諸韓国が、強大な魏国の支配下に組み込まれたとしたら、魏国と倭国とは国境を接することになるのです。そうなった時、朝鮮半島南端の狗邪韓国および倭国本土が、平穏無事であるという保証が何かありましょうか。
いいえ、いったいなにが切掛となって、両国の利害が対立するようなことになるか、計り知れない危うさだけがあって、魏国と倭国との両国の安全を確約する保証は一切無いに等しいのです。
たしかに、六年前の景初三年（二三九）十二月、魏国の天子から「親魏倭王」の印綬を賜りました。しかしそれは、魏国の友好国であることを示したものでしかなく、両国の今後の有り様を規制するものではない、といえましょう。ここのところは、ひとつ、慎重に対処しなければならないところと思われます。
しかも、諸韓国が魏国に屈する前に、今のうちにこそ予め、先を見通して手を打っておくべきだと思うのです」
難斗米は、困惑した面持ちの女王日御子に

さらに続けてこう言った。
「我国は、呉国や高句麗と手を結ぶことなく、ただ一筋に曹氏との友好関係をはぐくんでまいりました。しかも、我国は韓諸国の背後にあって絶大な勢力を誇っております。つまり、我国は、呉国と高句麗との間の連携を断つ大きな役割りを果たしているとともに、韓諸国の動向にも大きな力を及ぼしていると申せましょう。
仮りに魏国が倭国を敵に廻したらどうなりましょうか。
魏国は、蜀国・呉国・倭国・韓諸国・高句麗国と連らなる外周縁部の全ての列国と戦うことになるのです。しかも、韓諸国は、倭国の力を得て発奮し、多大の力を発揮するに違いありません。
即ち、魏国と倭国とが決裂状態になれば、呉国の勢力を著しく助長させるばかりでなく、魏国の東方支配に大きな翳りが生ずるのは明白です。
そこで私、――再び、魏国の都洛陽へ参って

コクヨ　ケ－20　20×20

天子に拝謁し、大局的な見地について思うところを述べ、諸韓国の彼方の海中の強国「倭国」と事を構えた場合の得失を説き、ーーーーさらに、両国のより一層の親交を願って、将来の為の「不可侵」の約束をとりつけるように努力ーしてきたいと存じます。どうか、私を朝貢の任に当らせていただきとうございます」

「ーーーー」

「そーて、はなはだ差出がましいことではございますが、その任を果して洛陽の都から帰朝する途中、ーーー少々足を伸して、細水を訪ねてきたいと考えているのです。梯儁殿はいかにお過しでございましょうか。あるいはもしかしたら、年が替り、心も変って、邪馬台国を恋い慕い、亀比売様のもとへ還りたいとお思いになっておいでかも知れません。どうか、ーーーーいま、ひとたび、女王の御姿と吐息とを玉匣にお収めになって、私におあづけ下さいますようお願い申し上げます。

(ほっと吐く息)

その新たな玉匣の霊力によって、梯儁殿をお連れすることが出来るかも知れない、と思うのです」

難斗米は、熱い想いを込めて、女王日御子の任命を請うのだった。

次頁から

前頁へ

「難斗米（中臣）よ。そなたの心遣は嬉しく思います。しかし、つい二年前（正始四年）に魏国へ朝貢したばかりですので、我が国の真意を詮索されるような結果にろうかと気がかりです。もう少し後のことにした方がよかろうと思われます。そして、梯儁様のことを貴方にお頼みするわけには参りません」

だが、難斗米は、日御子の頬がほんのり紅色に染ったのを見逃さなかった。

〈日の御子は、それをお望みなのだ〉

難斗米の意志は固く、その心を折れさせることは、日御子にさえも到底出来得ることではなかった。日御子はついに、難斗米の洛陽行きを認めた。

日御子の龍顔には生気が戻り、心には新たな希望が満ち溢れた。

＊

㊍967p　245 春　−24p 春　4才　㊍1425p 968−1/2　零奈勝　子公　魏太保 49p　2,156p−1/2　S60.4.21㊐　ぐんじん 軍人 667p　武者 2150p　ゆきかう 行き交う 2253p

、

※

こうして難升米は、玉匣を携え、船の人となった。

帯方郡に着くと、きらびやかな甲冑を身に纏った軍人達が慌しく行き交っており、以前とは比較にならないくらい[redacted]物物しくて、戦時下にある緊迫した厳しさが、身近に[illegible]感じられた。

しかしそんな時ではあったが、太守弓遵は、親魏倭王卑彌呼の使者として率善中郎将難升米が再び訪ねてきてくれたことを大いに喜び、その労をねぎらった。

※

「まあ嬉しいわ。またお会いできるなんて夢のようですわ」

正始元年（二四〇）の春に[redacted]帯方郡の後の百済の地で娶った妻も、大喜びし、難升米を迎えてくれた。

難升米（中臣）と、その妻との間に生まれた男の子（本大臣）は、——今、可愛い盛りであった。

なお、この後、（本大臣）の弟（小大臣）

が生まれることになる。
　そして、本大臣のはるかな子孫が、続紀の桓武天皇の天応元年（七八一）七月十六日条に記されている栗原勝子公の（中臣栗原連）なのであろう、と推察される。（第十二章〈伊香刀美〉、第十九章〈帯方郡太守弓遵〉の項参照）

＊

　帯方郡の太守弓遵は、使を遣わし、将て難升米等を送りて、京都に詣らしめた。
　六年ぶりに訪ねる洛陽の都。懐かしくも心ときめく魏の花の都、洛陽は、ー！ー！少しも変ることなく美しく華やいでいた。
「さすが、九州の都。天下の中心としてふさわしい都よ」（中国全土の中で冠たる
　東海の最果ての国から再びやってきた難升米の心は、あの大きな感動を覚えた時と同様

H30(2018)5.31(木)～6.1(4回)
H31(2019)1.21(月)～1.21(3回)
令和2(2020)2.4(火)～2.6(4回)

2157p

見事・美事 2109p

に、打ち震えていた。
「私が造っているあの東海海中の洛陽の都は、まだまだこの中華の洛陽の都に及ばない」
しかし、いつの日にか我が国の都も、このように美事に輝いてほしい」
難升米は、壮大な洛陽城を、さらにくい入るように見つめつづけた。